# 現代青年の自立性に関する研究
## ― 自立性尺度作成の試み ―

# A Study on the Independence of Modern Adolescents
## －A Trial Construction of an Independence Scale－

菱　田　陽　子[*1]　加　藤　礼　子[*2]　金　子　劭　榮[*3]

**要旨**

青少年の自立性の不足が指摘される現在、それを把握するための自立性尺度作成を目指して、大学生を対象とした質問紙調査を実施した。同種の尺度構成も参考にしながら、単に他者との分離ではなく対人関係における協調、他者との適切な依存、将来展望等を含んだ自立性を測定する尺度を考えた。独自性や感情統制等とともに、対人協調や将来展望を含んだ因子を確認し、一定の内的整合性と個人志向性・社会志向性尺度（伊藤, 1995 等）による併存的妥当性等を確認した。

**キーワード**：現代青年（学生）／自立性尺度／依存／対人協調／将来展望

## Ⅰ　問題

最近の青少年について、彼らの自立性の欠如が話題になることが少なくない。他人からの指示に従って行動する指示待ち症候群と呼ばれる子どもたちもいる。このような子どもたちは、自分らしく個性的で生き生きとした、快適で充実した生き方を実現することは難しいと思われる。自分の好みや考え方に従った生き方が、個人の満足感、充足感、自己効力感、自尊感情等を高めることは容易に推測されるが、自らの好みや考え方に従った生き方の実現はそう容易ではない。

自立・自律性の欠如傾向が認められるのは、自分なりの考え方をまとめたり提案するより、他人の指示に従う方が、間違いも犯さず楽であるためであるかも知れない。初めは軽微な事柄であっても、次第に慣習化し、かなり重要な事柄についても、自分で考えることを放棄してしまう。重要な事柄については自分で判断しようとしても、経験や訓練の蓄積がないために、適切な判断や選択ができず、対応に苦慮することも推測される。

大学生のアルバイトに関しても、大学卒業後の就労においても、社会人初心者としては、定められた仕事を誤りなく遂行することが求められる。間違いなく仕事をする者がさまざまな活躍をする機会に恵まれると考え、誤りを犯さないことに関心を向けざるを得ない。現実的には、他者からの指示に従って行動する場が多いことが推測される。

この状況から考えれば、親から離れて生きて行く段階の青年期までに、「自ら課題を見いだし、自ら考える」生きる力の基本とも考えられる自立性の獲得がなお重要である。

では、自立とは何であろうか。ある対象への依存から脱却すること、自分に関する事柄を自分で選択し、決定し、行動すること、自己意識をしっかりと持ち、他者と関わり合えること、あるいは自分の収入で生活していくこと等、さまざまなとらえ方がある。

自立のためには、自分をある程度客観視しなくてはならないが、そのための対人的環境が以前ほ

*1 Yoko HISHIDA
北陸学院大学短期大学部　コミュニティ文化学科
青年の心理
*2 Reiko KATO
石川県立保育専門学園
*3 Shoei KANEKO
石川県立大学　生物資源環境学部　教養教育センター

ど豊かではないことも問題である。また、青年が適切な自尊感情を持つことを必ずしも保障されているとは限らない。このような状況や、青年期の自立性は彼らのこれまでの発達における一つの結果であり、また将来への道のりにとって重要事項であること等を踏まえて、青年の自立がどのような状態であるのかを調べたい。

自立に関する研究は様々になされているが、自立性概念の側面は多様にあると考えられる為か、自立性尺度の、何を測ることによって自立を測ることができるかという方向性は必ずしも一致していない。尺度は、自立性の定義によって方向性が定められ作成されると考えられるが、その定義を定めることも単純ではないことから、尺度作りの困難さが生じているようにも思われる。

「自立」のとらえ方の個人差を分析する必要性や質的検討の不足も指摘されている（米田･金丸、2007）。

江口（1966）は、「真の柔軟な自立性とは頑固一徹とは異なる。外からの刺激を受け入れるが、その刺激に直接影響されず、自己の立場から反応できること」であり、「そのためには、刺激を受け止めるクッションをもっていること」であると述べている。更に、対人行動に対応する枠組みをもち、その枠組みの柔軟さ、フレキシブルさは、依存の結果できあがり、自立の質であろうとしている。

福島（1998）は、江口の依存と自立の考えに基づき、青年期から成人にかけての自立過程の調査を行い「日本の青年は、親との心理的分離を行った後、再び親や他者と信頼関係を確立してその絆を深めていること、また、人との関係の中で、時には他者に頼りながら自立を行っている」ことを述べ、自立は、自分のことは自分でできる独り立ちに加えて、依存性の要素が含まれるとしている。自立と依存を対極の概念としてのみ捉えるのではなく、青年は、「必要なときには他者に頼る、また心の支えを持つことで」自立を行っていたと述べている。福島（1995、1997、1998、1999a、1999b）は、青年期から成人の過程における自立を調べ、その性差、年齢差について報告している。福島（1997）は、成人の自立概念の構造を「相互理解･相互扶助」、「親･友人との信頼関係」、「独立」、「配偶者とのパートナーシップ」、「ソーシャルネットワーク」、「身辺自立」、「自己主張」の７側面とし、その側面に性差のあることも報告している。

大石らは、青年期から大人への時期に着目し、自立意識の構造を調べ、尺度作りをしている。大石ら（2006）では、青年から大人への「移行期に自立意識がどのように変化していくのか」を「自立するということ（自立観）」と「大人になるということ（大人観）」と名付けた二つの概念から調べている。その結果、大学生の自立観に最も影響しているのが「経済的自立」であるとし、「大人観」については、自由記述の調査から「経済的自立」、「精神的自立」、「責任」、「自己管理」の４つのキーワードを挙げ、大学生の「大人観」は、自立することが大人になることであると捉えられていると述べている。大石ら（2007、2008）は、自立尺度の検討を行ない、大学生の自立を「主体的自己」、「協調的対人関係」、「社会的関心」、「生活管理」、「生活身辺処理」、「経済的自活」、「親密な親子関係」の７側面からなるとし、性差も見られたことを明らかにしている。大学生の自立は親の態度や意識と関連あることが示唆され、その背景には、「経済的に自立したくても」自立しにくい社会構造が関与し、親からの圧力の少なさと同居を容認する態度などから若者のパラサイトな意識が作られているとしている。総じて、現代の大学生は、自宅にいて、経済的に自立していない状況でも親との親密な関係を保ち、居心地のよい空間のなかで、「個人化」は進んでいるとし、作成された自立尺度によって測定された大学生の自立から「親密で距離の近い親子関係の実態があきらかになった」とも述べている。

高坂・戸田（2006a）は、江口と江口に基づく福島の自立に関する「成熟した依存性」という自立の概念を支持し、青年期の心理的発達に注目しつつ、自立の概念を「成人期において適応するために必要な心理・社会的な能力を備えた状態」とし、「心理的自立は青年一人で獲得するものではなく」、「親子関係・家族関係が重要な基盤」となると述べている。この概念のもとに、青年の心理的自立を「行動的自立（実行と責任）」、「価値的自立：（価値観と判断）」、「情緒的自立：（自己統制と適切な対人関係）」、「認知的自立：（自己認知

と社会的知識・視野)」からなると定義し、「価値判断・実行」、「自己統制・客観視」、「現在把握と将来志向」、「適切な対人関係」、「社会的知識・視野」、「責任」の6下位尺度をもつ心理的自立尺度を作成している（2005)。

筆者らは、高坂らの心理的自立の4つの側面(行動的自立、価値的自立、情緒的自立、認知的自立)、6つの下位尺度、江口、福島らの依存性に加え、更に個人それぞれがもつ個性･独自性を加味して、現代青年の自立性を定義するとともに、その側面を仮定し、自立尺度の作成を試みる。

本研究における自立とは、「他者との関係を保ちながら、自らの考え方や行動の仕方に関して、他者の考え方や行動を参照することはあっても、他者からの明確な独立性を確保し、自らのもつ内的基準に照らして吟味し、自ら選択・決定する傾向であり、自分の力で、自らの責任を自覚しながら、考え、判断し、行動することが出来ることをいう。その際、自ら必要な支援を求めることを含む」とする。これらの自立においては、「行動的自立」、「認知的自立」、「情緒的自立(精神的安定)」、「自己統制感（自己効力感、自信など)」、「自立観(メタ認知、自立肯定意識)」、「適切な社会的認識･対人関係」の側面があると考える。この他、「現実的自立（財政的、物的・身体的自立)」の側面があるが、青年期の現実的自立が若者の自立側面としてはまだ未熟であることが推測されることから、青年の自立の側面には含めないこととする。

本研究では、高坂らの心理的自立の各側面に加えて、我々の考える以下の3つの側面、①親・大人からの自立、②適切な依存（親、家族、教師、友人などの他者からの行き過ぎない支援に頼る)、③個人の独自性（個性・ユニークさ）を、自立の概念の中心的課題として考えたい。

具体的には①価値判断・実行、②認知的自立、③情緒的自立、④自己統制感、⑤独自性、⑥適切な対人関係、⑦将来展望、の7側面を仮定する。

## Ⅱ　目的

本研究の目的は、現代青年の自立性の測定をめざす尺度作成のための基礎的な資料を収集することである。先行研究をも参照しつつ、青年の自立性と考えられる質問項目を収集・作成し、自立性尺度としての信頼性及び妥当性を検討する。具体的には、①内的整合性を確認すること、②妥当性の検討のために、個人志向性・社会志向性尺度（伊藤, 1995）を用いて、項目及び因子（下位尺度）について、併存的妥当性を検討し、また、現実に親元で生活しているか一人暮らしをしているかにより、自立性は異なると推測されるので、この視点からの検討も行う。

## Ⅲ　方法

### 調査対象及び調査実施時期

本調査では4年制大学5校の408名(男性223名、女性182名、不明3名）及び2年制短期大学3校の418名（男性9名、女性409名)、計826名（男性232名、女性591名、不明3名）を調査対象とした。そのうち年齢が20歳以下の者768名（男性206名、平均年齢18.83歳、標準偏差0.63歳、女性562名、平均年齢18.70歳、標準偏差0.68歳）を分析対象とした。

調査実施は2009年7月。

### 調査内容

高坂ら（2006b）の心理的自立尺度を構成している15項目（将来志向3、適切な対人関係4、価値判断実行2、責任3、自己統制3）に、我々が作成した、認知的、情緒的自立及び自己統制、独自性等に関する29項目を加えた計44項目（4件法）からなる自立性尺度を構築した。これとは別に、この調査のために我々が作成した、不適切な回答を検出するための16項目（4件法）を順不同で配置した。更に我々の自立性尺度の検討の為に、個人志向性・社会志向性PN尺度（伊藤, 1995）30項目（5件法）を使用した。なおフェースシートとして、性別、年齢、学年、居住形態（親･家族と同居、一人暮らし、学生寮）を尋ねている。

### 調査方法

各大学の授業中に授業担当者が調査への協力を依頼し、それぞれ授業担当者が作成された手引きに従って実施した。

## Ⅳ　結果と考察

### 回答の有効性

尺度構成のために信頼性及び妥当性を中心とした検討が必要であるが、今回我々は、得られた回

答の有効性についても検討した。言うまでもなく、質問紙調査或いは質問紙法による心理的特性の測定においては、被検者・調査協力者が、記載されている項目（質問）の内容を適切に理解し、感じたまま、考えたままを率直に回答していることを前提としている。しかし、従来から指摘されているように、項目内容の理解、回答に対する抵抗感、自我防衛傾向等が関与し、回答を歪ませることもある。ここでは改めてこの点についての点検をすることにした。

我々の調査では、質問項目に対してそれが自分に当てはまるか否かについて４段階或いは５段階での評定を求めている。これに対して、①連続して同一の評定値を多く示しているもの、②明らかに一致しなければならない項目に対する矛盾的回答、③通常は明らかに認められる或いは認められない事柄に対する回答、これとは別に、④いわゆる社会的望ましさ要因によって歪められる回答等を手がかりに（Table 1）、基本的な回答の有効性を確認した。

ここでは連続して16個以上（ほぼ１頁の半分に当たる項目数）同一の評定値を与えた者、大きく矛盾した回答（まったく逆の傾向を示す項目を４種類８項目準備しそれらについて極端に肯定或いは極端に否定した者）、明らかに虚偽回答であると認められるものが４項目中３項目以上認められた者、社会的望ましさ要因による歪みが４項目中３項目以上認められた者、のいずれかに該当する者を除外した。

Table 1　不適切回答点検のための質問項目

| | |
|---|---|
| 不一致確認項目 | 友だちを作るのが苦手だ<br>新しい友だちはすぐできる |
| | 人を疑うことは殆どない<br>他人を信じられない |
| | 人の好き嫌いがある<br>だれとでもうまくつきあえる |
| | テレビは殆ど見ない<br>テレビをよく見る |
| 虚偽項目 | 欲しいものが手に入らなかったことはない<br>風邪をひいたことはない<br>思い悩んだことはない<br>夢をみたことはない |
| 社会的望ましさ | 講演会などで、私語（雑談）をしたことがない<br>うををついたことはない<br>横断歩道でないところを横断したことがない<br>世の中の規則はすべて守っている |

これらの点検により、20歳以下の被検者768人についての分析対象者は737人（男性185名、平均年齢18.85歳、標準偏差0.63歳、女性552名、平均年齢18.69歳、標準偏差0.68歳）となった。

ここでの処理については、その判断基準の曖昧な部分があり、必ずしも十分であると判断することはできないが、この種の吟味は今後改めて必要であり、今後の質問紙調査の実施について、更に検討する必要があると考えている。

**自立性項目の妥当性の検討**

**①一人暮らし経験との関係**

ここで対象になった大学生の内、親元を離れて一人暮らしをしている学生も少なくない（255名34.6％、同居454名）。まだ必ずしも長期間ではないが、彼らは苦労しながらも身の回りのことを自分でする経験などを通して、自立的行動を獲得してきたと考えられる。従って、ここでの自立性項目で親元を離れずに暮らしている学生とは異なる回答をしていると思われ、彼らの回答傾向は、我々が考えている自立性の考え方或いはそれに基づく項目の適切さに関して、何らかの情報を提供してくれると思われる。一人暮らしをしている者と、家族と同居している者について、各項目の評定平均値を比較した結果、44項目中17項目において差が見られた（Table 2, t検定）。

一人暮らしの学生と、家族と同居している学生との間に差が認められたのは、自立するために何が必要かを理解したり、自分一人で判断し、感情をコントロールすることに関連する項目である。

一方、我々が自立性にとって重要と考えた項目の中で、自分自身の独自性を大切にする、すなわち自分ならではの好みや考えがあり、他者に対して自分の意見や行動を示し、簡単に周囲の人の影響を受けたり流されてしまうことはないと考える内容の項目では、有意差が認められなかった。

この理由としては、言うまでもなく我々が考えた項目が適切でない可能性がある。その一方で、一人暮らしを始めた大学生が他の大学生と比較して自立性が高いとした、我々の仮定が適切であったか否かの問題がある。短期間とはいえ一人暮らしをすることで、現実的な生活に関わる自立性の側面はある程度高まるとも考えられる。しかし、

Table 2　家族と同居と別居（一人暮らし）による相違

| | 同居 | 別居 | 有意差 |
|---|---|---|---|
| 1. 自分の意見をはっきりと言うことができる | 2.64 | 2.59 | |
| 3. 周りの人と協力して物事に取り組むことができる | 3.14 | 3.10 | |
| 4. 一人暮らしがうまくできるには何が必要か分かっている | 2.48 | 2.84 | ** 同居＜別居 |
| 5. 自分が将来何をしたいのかについて考えをもっている | 2.82 | 2.93 | |
| 7. これまでにはこだわらず、自分が良いと思ったことをしている | 2.71 | 2.79 | |
| 8. 簡単に周囲の人の影響を受けてしまう | 2.96 | 2.89 | |
| 12.新しいことを提案するのは、いつも自分だ | 2.06 | 2.12 | |
| 13.周りの人とよい関係を維持することができる | 2.88 | 2.89 | |
| 14. 家族から自立するには何が大切かを知っている | 2.58 | 2.76 | ** 同居＜別居 |
| 15. みんなと同じような服装はしたくない | 2.61 | 2.69 | |
| 16. 責任ある立場には立ちたくない | 2.69 | 2.64 | |
| 17. 周りの人の意見に流されやすい | 2.80 | 2.78 | |
| 19. 他人の気持ちを思いやることができる | 3.07 | 3.01 | |
| 20. 自分の考え方を人に分からせる自信がある | 2.32 | 2.41 | |
| 21. 流行にふりまわされることに抵抗がある | 2.53 | 2.73 | ** 同居＜別居 |
| 22.将来に対する見通しや考えをもって生活している | 2.50 | 2.65 | * 同居＜別居 |
| 23. 行事のときなど、自分からは何もしないことが多い | 2.45 | 2.44 | |
| 24. 相手の気持ちを察して、適切な対応ができる | 2.88 | 2.83 | |
| 25. いつでも新しいことをやってみる | 2.44 | 2.51 | |
| 26. 多少トラブルがあっても、人と違った自分の考え方を大切にすべきだ | 2.88 | 2.92 | |
| 27. 精神的に自立するには何が必要かを知っている | 2.42 | 2.59 | ** 同居＜別居 |
| 28. どういうときに友だちに頼ってもよいかを知っている | 2.73 | 2.84 | |
| 30. 自分ならではの好みや考え方がある | 3.19 | 3.26 | |
| 31. 何をするときも、うまく出来そうな気がする | 2.27 | 2.41 | * 同居＜別居 |
| 32. 自分の将来のことをよく考えている | 2.70 | 2.75 | |
| 33. 自分のことは自分で判断することができる | 2.72 | 2.81 | |
| 34. 友だちに頼りすぎる傾向がある | 2.57 | 2.50 | |
| 35. たいてい、人の助けを借りずに判断できる | 2.35 | 2.46 | * 同居＜別居 |
| 36. 他人の意見に簡単に賛成するのは良くないと思う | 2.64 | 2.79 | ** 同居＜別居 |
| 37. 何をするにも自信がない | 2.55 | 2.38 | ** 同居＞別居 |
| 38. いつも落ち着いて行動できる | 2.44 | 2.55 | * 同居＜別居 |
| 39. 将来の目標がなかなか定まらない | 2.44 | 2.40 | |
| 41. 悲しみ、怒りなどの感情を自分で落ち着かせることができる | 2.66 | 2.82 | ** 同居＜別居 |
| 43. 家族から離れるととても不安である | 2.38 | 2.03 | ** 同居＞別居 |
| 45.つい感情にまかせて行動してしまう | 2.66 | 2.42 | ** 同居＞別居 |
| 46.自分の決めたことには責任がもてる | 2.73 | 2.78 | |
| 48.家から自立するには何が大切かを知っている | 2.47 | 2.63 | ** 同居＜別居 |
| 49.他人と違っていても、私自身の考え方は大切だ | 3.17 | 3.16 | |
| 50.失敗したときも、冷静に考えることができる | 2.43 | 2.59 | ** 同居＜別居 |
| 52.自分の言ったことに責任をもつことができる | 2.55 | 2.65 | |
| 54.かなり重要なことでも、自分一人で決めることができる | 2.02 | 2.20 | ** 同居＜別居 |
| 57.自分なりの価値判断の基準を持っている | 2.92 | 2.99 | |
| 59.状況にあわせて感情をコントロールすることができない | 2.17 | 2.14 | |
| 60.どうすれば経済的に自立できるか、よく分からない | 2.48 | 2.28 | ** 同居＞別居 |

* p<.05, ** p<.01

一人暮らしは、学生におけるさまざまな体験の一つに過ぎず、また一人暮らしの経験が自立性に反映されるのはまだかなり先のことであるかも知れない。

ひとつの参考にすべき情報として受け止めたい。

### ②伊藤の個人志向性・社会志向性との関係

伊藤の個人志向性・社会志向性 PN 尺度は人格の成熟や適応のプロセスを語る上での２大概念である個性化、社会化を個人志向性・社会志向性として概念化し、発達や適応の肯定・否定両側面の測定も可能な尺度である（泊、2001）。

ここでは、併存的妥当性の観点から、伊藤（1995）による「個人志向性・社会志向性」によって測定される傾向と、ここで作成しようとしている「自立性」尺度で測定しようとしているものについて、検討を加えることにする。

伊藤による「個人志向性･社会志向性」尺度（以下、伊藤尺度と呼ぶ）では、ポジティブな個人志向性と社会志向性、ネガティブな個人志向性と社会志向性を測定することが出来るが、ポジティブであれネガティブであれ、個人志向性の高い者は、本研究における自立性尺度項目では、より自立的

方向へ回答すると思われる。また、我々が測定しようとする自立性は肯定的であるものを考えているので、PN（ポジティブ・ネガティブ）による評定値の相違も認められると思われる。

そのような傾向を予想しながら項目毎に、伊藤尺度の個人志向性の強さ、社会志向性の強さについて、それが高い群と低い群との間に相違があるかを明らかにする。この分析のための群構成については、ここでは平均値 ± 1/2 標準偏差を境に、高群、中群、低群を構成する。これによって、例えばポジティブな個人志向性（PI）の高さが、項目への回答傾向を弁別するか否かを確かめることができる。Table 3 は、各項目への評定平均値が、伊藤尺度におけるポジティブな個人志向性等の高

Table 3　伊藤尺度による個人・社会志向性高低群の比較（1）

| 項　　目 | 志向性高低比較 | | | |
|---|---|---|---|---|
| | PI | PS | NI | NS |
| 1. 自分の意見をはっきりと言うことができる | 高 | 高 | 高 | 低 |
| 3. 周りの人と協力して物事に取り組むことができる | 高 | 高 | 低 | 低 |
| 4. 一人暮らしがうまくできるには何が必要か分かっている | 高 | 高 | ns | 低 |
| 5. 自分が将来何をしたいのかについて考えをもっている | 高 | 高 | ns | 低 |
| 7. これまでにはこだわらず、自分が良いと思ったことをしている | 高 | 高 | 高 | 低 |
| 8. 簡単に周囲の人の影響を受けてしまう | 低 | ns | 低 | 高 |
| 12.新しいことを提案するのは、いつも自分だ | 高 | 高 | 高 | 低 |
| 13.周りの人とよい関係を維持することができる | 高 | 高 | 低 | 低 |
| 14. 家族から自立するには何が大切かを知っている | 高 | 高 | ns | 低 |
| 15. みんなと同じような服装はしたくない | 高 | ns | 高 | 低 |
| 16. 責任ある立場には立ちたくない | 低 | 低 | ns | 高 |
| 17. 周りの人の意見に流されやすい | 低 | ns | 低 | 高 |
| 19. 他人の気持ちを思いやることができる | 高 | 高 | 低 | ns |
| 20. 自分の考え方を人に分からせる自信がある | 高 | 高 | 高 | 低 |
| 21. 流行にふりまわされることに抵抗がある | ns | ns | 高 | ns |
| 22.将来に対する見通しや考えをもって生活している | 高 | 高 | 高 | 低 |
| 23. 行事のときなど、自分からは何もしないことが多い | 低 | 低 | ns | 高 |
| 24. 相手の気持ちを察して、適切な対応ができる | 高 | 高 | 低 | 低 |
| 25. いつでも新しいことをやってみる | 高 | 高 | 高 | 低 |
| 26. 多少トラブルがあっても、人と違った自分の考え方を大切にすべきだ | 高 | 高 | 高 | 低 |
| 27. 精神的に自立するには何が必要かを知っている | 高 | 高 | ns | 低 |
| 28. どういうときに友だちに頼ってもよいかを知っている | 高 | 高 | ns | 低 |
| 30. 自分ならではの好みや考え方がある | 高 | 高 | 高 | 低 |
| 31. 何をするときも、うまく出来そうな気がする | 高 | 高 | 高 | 低 |
| 32. 自分の将来のことをよく考えている | 高 | 高 | ns | 低 |
| 33. 自分のことは自分で判断することができる | 高 | 高 | 高 | 低 |
| 34. 友だちに頼りすぎる傾向がある | 低 | ns | ns | 高 |
| 35. たいてい、人の助けを借りずに判断できる | 高 | ns | 高 | 低 |
| 36. 他人の意見に簡単に賛成するのは良くないと思う | 高 | ns | ns | 低 |
| 37. 何をするにも自信がない | 低 | 低 | ns | 高 |
| 38. いつも落ち着いて行動できる | 高 | 高 | ns | 低 |
| 39. 将来の目標がなかなか定まらない | 低 | 低 | ns | 高 |
| 41. 悲しみ、怒りなどの感情を自分で落ち着かせることができる | 高 | 高 | 低 | 低 |
| 43. 家族から離れるととても不安である | 低 | ns | ns | 高 |
| 45.つい感情にまかせて行動してしまう | ns | 低 | 高 | 高 |
| 46.自分の決めたことには責任がもてる | 高 | 高 | ns | 低 |
| 48.家から自立するには何が大切かを知っている | 高 | 高 | ns | 低 |
| 49.他人と違っていても、私自身の考え方は大切だ | 高 | 高 | 高 | 低 |
| 50.失敗したときも、冷静に考えることができる | 高 | 高 | ns | 低 |
| 52.自分の言ったことに責任をもつことができる | 高 | 高 | ns | 低 |
| 54.かなり重要なことでも、自分一人で決めることができる | 高 | ns | 高 | 低 |
| 57.自分なりの価値判断の基準を持っている | 高 | 高 | 高 | 低 |
| 59.状況にあわせて感情をコントロールすることができない | 低 | 低 | 高 | 高 |
| 60.どうすれば経済的に自立できるか、よく分からない | 低 | 低 | ns | 高 |

(注)表中、「高」、「低」、「ns」は、伊藤尺度による肯定的個人志向性(PI)等の4得点について、それが高い群と低い群とを比較して、当該項目の評定値が、それぞれ「高群の方が有意に高い」、「低群の方が有意に高い」、「高群と低群間に有意差が認められない」ことを示している。

群と低群との間で有意差が認められたもので、いずれの群の評定平均値が高いといえるか、つまりその項目が示している傾向を肯定している傾向が強いかを示している。例えば、PI 欄に「高」と示したものは、PI についての高群の方が低群よりも、この項目の評定値が有意に高いことを示し、「低」と示したものは、PI についての低群の方が高群よりも、この項目の評定値が有意に高いことを示している。

これらの傾向をみると、我々の作成し採用した項目は、それなりに伊藤尺度の個人志向性・社会志向性と対応しており、一定の自立性を測定していると考えることが出来る。ただし、PI についての高群と低群との評定値に有意差が認められなかった「21 流行にふりまわされるのに抵抗がある」及び「45 つい感情にまかせて行動してしまう」は、必ずしも適切な項目であると判断することは出来ない。

さらにこれらの項目に対する伊藤尺度との関係を明らかにするために、回答傾向をより分かりやすく示すものとして、改めて Table 4 を作成した。ここでは例えば、PI-NI 欄は、ポジティブにしろネガティブにしろ個人志向性の高群と低群との弁別のされ方が一致している場合に○で示している。即ち、PI-NI 欄に○がある項目は、PI についての高群と低群との間の差の現れ方が（例えば、PI の高群の方が低群よりも評定値が高い）、NI についての高群と低群との間の差の現れ方と一致する（例えば、NI についても高群の方が低群よりも評定値が高い）ことを示している。

PI × NS 欄は、ポジティブな個人志向性とネガティブな社会志向性についての高群と低群との弁別のされ方が反対の場合に○で示しており、PI についての高群と低群との間の差の現れ方（例えば、PI の高群の方が低群よりも評定値が高い）が、NS についての高群と低群との間の差の現れ方と逆であることを示している（例えば、NS については高群の方が低群よりも評定値が低い）。いずれか一方でも（例えば、PI についての高群と低群との間に）有意差が認められない場合を含めて、逆の傾向が認められない場合には、その項目については空欄になっている。

これらを参照しながら、各項目への回答傾向との関係をみることにする。

P であっても N であっても、群間の差の現れ方が一致しているものに注目すると、個人志向性では 18 項目であり、独自性や自信に関係した項目が多い。他方、社会志向性については、一致した差の出方をしているものはない。

個人志向性と社会志向性とによる現れ方が逆のものは、ポジティブなものについては認められず、他方ネガティブなものについては先と同じ 18 項目について（個人志向と社会志向とが）逆の関係にある。

個人志向及び社会志向の中で、ポジティブとネガティブの間で、逆に差が出るのは、個人志向では 6 項目だけだが、社会志向では 10 項目を除いて多くの項目で認められた。つまり、社会志向性がポジティブであるかネガティブであるかによって、差の出方が逆になる。言い換えれば、社会志向性については、その肯定・否定による逆の関係が認められる。

さらに個人志向・社会志向と肯定・否定が交絡している、ポジティブな個人志向とネガティブな社会志向との間には、殆どの項目について、逆の関係になっている。これとは反対の、ポジティブな社会志向とネガティブな個人志向との逆の関係は僅か 7 項目だけである。

既に述べたように、独自性や自信などに関係した項目は、（P でも N でも）個人志向性と対応しているが、ネガティブな個人志向性及び社会志向性とは逆の関係、つまり、同じ項目について個人志向傾向の強い者が高い傾向の項目は社会志向傾向の強い者が低い傾向にある。例えば、（P でも N でも）個人志向傾向の強い者の方が「自分の意見をはっきりと言うことができる」が、ネガティブな個人志向傾向が強い者の方がその傾向があるのに対して、ネガティブな社会志向的傾向が強い者にはこの傾向が認められない。

ここで得られた傾向は簡単ではないが、全体的に見ると、伊藤尺度における個人志向性はかなり我々の尺度項目と対応しているとともに、それぞれの志向性の P か N かが、各項目に対する回答傾向に影響しており、我々が考えている良好な依存や対人関係、適切な自立性を測定している可能性を窺わせる。我々が考える良好な依存関係等を

Table 4　伊藤尺度による個人・社会志向性高低群の比較（2）

| 項　　目 | PN一致 | | IS逆 | | PN逆 | | 複合逆 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | PI-NI | PS-NS | PI×PS | NI×NS | PI×NI | PS×NS | PI×NS | PS×NI |
| 1. 自分の意見をはっきりと言うことができる | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | |
| 3. 周りの人と協力して物事に取り組むことができる | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 4. 一人暮らしがうまくできるには何が必要か分かっている | | | | | | ○ | ○ | |
| 5. 自分が将来何をしたいのかについて考えをもっている | | | | | | ○ | ○ | |
| 7. これまでにはこだわらず、自分が良いと思ったことをしている | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | |
| 8. 簡単に周囲の人の影響を受けてしまう | ○ | | | ○ | | | ○ | |
| 12. 新しいことを提案するのは、いつも自分だ | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | |
| 13. 周りの人とよい関係を維持することができる | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 14. 家族から自立するには何が大切かを知っている | | | | | | ○ | ○ | |
| 15. みんなと同じような服装はしたくない | ○ | | | ○ | | | ○ | |
| 16. 責任ある立場には立ちたくない | | | | | | ○ | ○ | |
| 17. 周りの人の意見に流されやすい | ○ | | | ○ | | | ○ | |
| 19. 他人の気持ちを思いやることができる | | | | | ○ | | | ○ |
| 20. 自分の考え方を人に分からせる自信がある | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | |
| 21. 流行にふりまわされることに抵抗がある | | | | | | | | |
| 22. 将来に対する見通しや考えをもって生活している | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | |
| 23. 行事のときなど、自分からは何もしないことが多い | | | | | | ○ | ○ | |
| 24. 相手の気持ちを察して、適切な対応ができる | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 25. いつでも新しいことをやってみる | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | |
| 26. 多少トラブルがあっても、人と違った自分の考え方を大切にすべきだ | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | |
| 27. 精神的に自立するには何が必要かを知っている | | | | | | ○ | ○ | |
| 28. どういうときに友だちに頼ってもよいかを知っている | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | |
| 30. 自分ならではの好みや考え方がある | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | |
| 31. 何をするときも、うまく出来そうな気がする | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | |
| 32. 自分の将来のことをよく考えている | | | | | | ○ | ○ | |
| 33. 自分のことは自分で判断することができる | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | |
| 34. 友だちに頼りすぎる傾向がある | | | | | | | ○ | |
| 35. たいてい、人の助けを借りずに判断できる | ○ | | | ○ | | | ○ | |
| 36. 他人の意見に簡単に賛成するのは良くないと思う | | | | | | | ○ | |
| 37. 何をするにも自信がない | | | | | | ○ | ○ | |
| 38. いつも落ち着いて行動できる | | | | | | ○ | ○ | |
| 39. 将来の目標がなかなか定まらない | | | | | | ○ | ○ | |
| 41. 悲しみ、怒りなどの感情を自分で落ち着かせることができる | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 43. 家族から離れるととても不安である | | | | | | | ○ | |
| 45. つい感情にまかせて行動してしまう | | | | | | ○ | | ○ |
| 46. 自分の決めたことには責任がもてる | | | | | | ○ | ○ | |
| 48. 家から自立するには何が大切かを知っている | | | | | | ○ | ○ | |
| 49. 他人と違っていても、私自身の考え方は大切だ | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | |
| 50. 失敗したときも、冷静に考えることができる | | | | | | ○ | ○ | |
| 52. 自分の言ったことに責任をもつことができる | | | | | | ○ | ○ | |
| 54. かなり重要なことでも、自分一人で決めることができる | ○ | | | ○ | | | ○ | |
| 57. 自分なりの価値判断の基準を持っている | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | |
| 59. 状況にあわせて感情をコントロールすることができない | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 60. どうすれば経済的に自立できるか、よく分からない | | | | | | ○ | ○ | |

含んだ自立性は、そう簡単に確認できるものではなく、検討を継続する必要があるが、ここでの項目について、一定程度の妥当性を確認することが出来たと考える。

**自立尺度の因子構造**

我々が最終的に作成した自立性の尺度項目は、先に述べた本研究での定義に従い、44 項目であった。そこで測定しようとする下位尺度としては、「価値判断･実行」、「認知的自立」、「情緒的自立」、「適切な対人関係」、「確かな将来展望」、「自己統制感」、「独自性」を考えた。

これらを考慮しながら因子分析（最尤法）により、因子構造を確認しようと考えた。軸の回転については、単純構造を目指し、各因子の項目数が極端に異ならない（下位尺度を構成する項目数を揃える）ことをも考え、因子負荷量等を参照し、27 項目について最終解（プロマックス法による

Table 5　自立性の因子構造（最尤法、プロマックス法）

| 項　目 | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅳ | Ⅴ | Ⅵ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 5. 自分が将来何をしたいのかについて考えをもっている | **.895** | .013 | -.049 | -.001 | -.008 | .038 |
| 39. 将来の目標がなかなか定まらない | **-.821** | .028 | .096 | -.035 | -.008 | .043 |
| 32. 自分の将来のことをよく考えている | **.728** | .052 | .066 | .018 | -.017 | .044 |
| 22.将来に対する見通しや考えをもって生活している | **.661** | .029 | .151 | -.057 | .004 | -.010 |
| 30. 自分ならではの好みや考え方がある | .048 | **.636** | -.124 | .032 | -.040 | .002 |
| 57.自分なりの価値判断の基準を持っている | .029 | **.616** | -.050 | -.022 | .051 | .038 |
| 49.他人と違っていても、私自身の考え方は大切だ | -.005 | **.600** | -.063 | .077 | -.025 | .042 |
| 26. 多少トラブルがあっても、人と違った自分の考え方を大切にすべきだと思う | .016 | **.527** | .058 | -.060 | -.069 | -.016 |
| 7. これまでにはこだわらず、自分が良いと思ったことをしている | .047 | **.365** | .082 | .020 | .003 | -.030 |
| 15. みんなと同じような服装はしたくない | -.072 | **.357** | .082 | -.014 | -.176 | -.126 |
| 48.家から自立するには何が大切かを知っている | -.036 | -.054 | **.883** | .074 | -.100 | .001 |
| 4. 一人暮らしがうまくできるには何が必要か分かっている | .031 | -.070 | **.693** | .039 | .007 | .041 |
| 27. 精神的に自立するには何が必要かを知っている | -.020 | .119 | **.619** | -.028 | .006 | -.030 |
| 60.どうすれば経済的に自立できるか、よく分からない | -.156 | .062 | -.339 | .071 | -.241 | .014 |
| 3. 周りの人と協力して物事に取り組むことができる | .018 | -.064 | .034 | **.766** | -.091 | .023 |
| 13.周りの人とよい関係を維持することができる | -.026 | .008 | .030 | **.590** | .097 | .010 |
| 19. 他人の気持ちを思いやることができる | -.032 | .055 | .026 | **.527** | .111 | .111 |
| 23. 行事のときなど、自分からは何もしないことが多い | -.133 | .053 | .053 | **-.436** | .098 | .240 |
| 24. 相手の気持ちを察して、適切な対応ができる | -.034 | .133 | .055 | **.433** | .089 | .019 |
| 41. 悲しみ、怒りなどの感情を自分で落ち着かせることができる | -.018 | .011 | .018 | .011 | **.667** | .038 |
| 45.つい感情にまかせて行動してしまう | -.036 | .239 | .039 | .037 | **-.609** | .030 |
| 59.状況にあわせて感情をコントロールすることができない | .014 | .047 | .129 | -.186 | **-.519** | .013 |
| 38. いつも落ち着いて行動できる | -.034 | .084 | .062 | -.026 | **.484** | -.078 |
| 50.失敗したときも、冷静に考えることができる | -.026 | .249 | .107 | -.008 | **.389** | -.093 |
| 17. 周りの人の意見に流されやすい | .005 | .033 | .014 | -.028 | .035 | **.920** |
| 8. 簡単に周囲の人の影響を受けてしまう | .016 | -.036 | .004 | .040 | -.052 | **.694** |
| 34. 友だちに頼りすぎる傾向がある | .003 | -.061 | -.013 | .029 | -.157 | **.354** |
| 因子間相関 | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅳ | Ⅴ | Ⅵ |
| 将来展望 | | .289 | .337 | .303 | .177 | -.244 |
| 独自性 | .289 | | .455 | .273 | .310 | -.368 |
| 自立の認識 | .337 | .455 | | .248 | .375 | -.252 |
| 対人協調 | .303 | .273 | .248 | | .323 | .000 |
| 感情統制 | .177 | .310 | .375 | .323 | | -.270 |
| 影響受けやすさ | -.244 | -.368 | -.252 | .000 | -.270 | |

斜交解）を得た（Table 5）。

ここで得られた因子については、項目内容などから、「将来展望」、「独自性」、「自立の認識」、「対人協調」、「感情統制」、「影響受けやすさ」であると考えた。

各因子の下位尺度を考え、その内的整合性を示す Chronbach の $\alpha$ 係数を求めたところ、将来展望 $\alpha=.86$、独自性 $\alpha=.67$、自立の認識 $\alpha=.74$、対人協調 $\alpha=.69$、感情統制 $\alpha=.68$、影響受けやすさ $\alpha=.70$ であり、「将来展望」と「自立の認識」の 2 因子については一応の信頼性を確認できたが、他の 4 因子についての信頼性はやや低く、関連する項目が必ずしも整っていない。特に「独自性」や「影響受けやすさ」に関しては、人間の強さに関わるものであり、自立を考える上では重要であると思われるので、更に適切な項目を考える必要がある。

**因子から見た妥当性の検討**

**①伊藤尺度との関係**

我々の考える自立性を構成する各因子（下位尺度）は、伊藤尺度の特性（個人志向性・社会志向性）と意味のある関連を示すと予想される。

伊藤尺度のポジティブな個人志向性は、他者の眼差しにとらわれることなく、自らの個性を大切にしようとするものである。我々の考える自立性は、その人らしさ、すなわち、その個人に特有で他者とは異なる独自性の表出も含まれており、また自らの力で選択、決定する力である。そこで、ポジティブな個人志向性は今回得られた「独自性」及び「将来展望」因子との正の関連性が、また「影響受けやすさ」因子とは負の関連性が予測される。「自立の認識」「対人協調」「感情統制」の各因子は、個々の自立のための大切なベースとなる特性であり、それぞれ正の関連性が予測される。また、ポ

Table 6　伊藤尺度との関係

| | 将来展望 | 独自性 | 自立の認識 | 対人協調 | 感情統制 | 影響受けやすさ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 個人志向P | .634** | .617** | .432** | .344** | .347** | -.511** |
| 社会志向P | .338** | .329** | .295** | .588** | .308** | .026 |
| 個人志向N | .024 | .265** | .059 | -.329** | -.283** | -.205** |
| 社会志向N | -.285** | -.351** | -.255** | -.174** | -.284** | .626** |

* p<.05, ** p<.01

ジティブな社会志向性は、周りの人との調和や相互依存を考えており、「対人協調」「感情統制」因子と正の関連性が予測される。

さらに、ネガティブな個人志向性や社会志向性は自己愛や個人主義、依存や他者への追従といった状態を意味している。我々の考える自立性は他者との関係を保ちながらのものであり、「独自性」「将来展望」「自立の認識」「対人協調」「感情統制」因子とは負の、「影響受けやすさ」因子とは正の関連が予測される。

これらの関係を確かめるために、伊藤尺度の４つの測度即ちポジティブな個人志向性（個人志向性 P）、ポジティブな社会志向性（社会志向性 P）、ネガティブな個人志向性（個人志向性 N）及びネガティブな社会志向性（社会志向性 N）と、ここで得られた自立性６因子の因子得点とについて、相互の相関係数を求めた（Table 6）。

これによれば、「将来展望」、「独自性」、「自立の認識」、「対人協調」、「感情統制」の各因子はポジティブな各志向性と正の相関を、「影響受けやすさ」因子と負の相関を示している。また、ポジティブな社会志向性と「対人協調」因子との関連やネガティブな社会志向性との関連も確認され、我々の予測に一致した結果が認められた。

さて、我々がここで考えた項目はネガティブな側面を含んでいない。今回、予測と異なりネガティブな個人志向性が「独自性」因子と正の相関を示したことは、受け取り方によっては、自分の考えを大事にする自己主張とわがまま勝手とがうまく分離されなかったともいえる。しかしながら、社会志向性 P と正の相関、N と負の相関がみられており、他者との良い関係のなかでの独自性であり、ここで考えられた自立性をある程度測りうると考えられる。また、「影響受けやすさ」因子はネガティブな社会志向性と正の相関を示している。

やゝ係数としては小さいものをも含め、予測と異なる傾向は認められず、我々の尺度は全体的に妥当なものであることを示している。

我々が重要であると考えている独自性は、PN 両方を合わせ持つという関係がみられるが、ここでは社会志向 N との負の関係から、自立性を測るものと考え得る。

ここでの自立性因子が（「影響受けやすさ」を除いて）、社会志向性 P とそれなりの正の相関を示し、また社会志向性 N とマイナスの相関を示していることは、未熟で一方的な依存や追従ではなく、他者との調和を保ちつつ自らの個性、考えを大切にするというポジティブな志向性と強い関連を示していることであり、ここで我々が考えた自立性をある程度測定している可能性を窺わせる。

以上から、自立性尺度と個人志向性・社会志向性 PN 尺度との間には、ある程度期待された方向での相関係数が得られており、一定程度の併存的妥当性が確認できたと考える。

### ②居住形態との関係

ここでは、自立性尺度の各因子と居住形態の違い（家族と同居あるいは一人暮らし）との関連を、自立性因子を単位として検討する。

Table 7 は、ここで得られた因子について、因子得点の平均値を比較したものである。ここでは、家族と同居している者と一人暮らしをしている者との間に、「自立の認識」及び「感情統制」因子

Table 7　自立下位尺度の同居・別居差

| | 同居 | 別居 | 有意差 |
|---|---|---|---|
| 将来展望 | -.043 | .087 | |
| 独自性 | -.045 | .075 | |
| 自立の認識 | -.118 | .200 | ** 同居＜別居 |
| 対人協調 | .020 | -.033 | |
| 感情統制 | -.097 | .153 | ** 同居＜別居 |
| 影響受けやすさ | .036 | -.053 | |

** p<.01

において、有意な差が認められた（p<.01）。家族から離れ一人暮らしをしている学生の反応から、自立のためには何が大切であるかを知ること、感情をコントロールできることについて、適切に測定していることを窺わせる。なお、「将来展望」や「独自性」についても10％水準で差がある傾向も認められている。

しかし、ここで得られた結果は、先の項目毎の検討の場合と同様、一人暮らしの経験による自立性の獲得を過大評価しない方が良いと思われる。

## Ⅴ　全体的考察

いくつかの視点から、我々が作成しようとしている自立性尺度の信頼性及び妥当性の検討を行ってきた。内的整合性については項目数の少なさも関係して、必ずしも十分な結果を得ることが出来なかった。妥当性については、今後の関連調査などにも期待したいが、伊藤による個人志向性・社会志向性傾向との関連から、それなりの併存的妥当性の確認が出来たと考える。

しかしながら、これらの分析を通して、以下のような課題も残された。

第１には、ここで作成した自立性尺度が先行研究で作成されている自立性尺度と異なる独自性があることを立証するには、伊藤による「個人志向性・社会志向性PN尺度」ばかりではなく、他の既成尺度、例えば、関（1982）による「依存欲求尺度」、山岡（1994）による「ユニークネスス尺度」、岡本（1985）による「独自性欲求尺度」、高田（2000）による「相互独立的・相互協調的自己観尺度」等との関係をみることを含め、作成した自立性尺度の多角的な検討が必要であると考えている。

また、我々の自立性尺度が目指す自立性が、いかに特色ある独自性をもつものであるかについて、更なる吟味とその測定方法の改善をはからなければならない。本稿で繰り返し述べてきたように、我々がその測定を目指す自立性が良好な、ポジティブな自立性であるとしていても、より具体的にその内容をより明確に定義し示す必要がある。

第２には、これと関連して、自立性の定義の検討を先行研究、関連文献によるばかりではなく、青年達に対する面接等を通して彼らの声を聞き、定義に反映させる事も重要であると考えている。我々もその定義について様々に検討を重ねてきたが、自立性のもつ広さや深さなどの複雑さを知る結果となり、明確な青年の自立性の定義を得るには至っていない。青年のもつ自立性や彼らが目指す自立性が、時代や環境の感化を受け、変化することも推測される。このようなことを考慮すれば、今後、この問題をどの様に定めて調査・研究していくか考える必要がある。具体的には、例えば半構造化面接を取り入れることなども含め、現実の自立性についてさらに検討していかなければならない。自立性の個人差を、概念化し測定するのは簡単ではなく、今後の更なる検討の蓄積が必要である。

第３に、今回の分析においても、我々の考えた適切な依存性や良好な対人関係を含めた自立性を測定できたことを窺わせる側面もみえるが、その測定を確認するには至っていない。これまでのさまざまな研究者たちによって取り組まれながら、必ずしもその測定や確認ができていないことを踏まえて、更なる吟味が必要である。

これまで繰り返し述べてきたように、自立性は単に他人との結びつきがないことを示すものではないと、我々は考えている。他者とのつながり、絆を大切にする、甘えとは異なる良質の依存性を伴うような自立性が考えられるべきである。ここで得られた因子「適切な対人関係」の中にこの部分が含まれることがひとつの形であるとも考えられるが、ここでそれが確認されたとは必ずしも言えない。項目作成段階で、更なる吟味・検討が必要であったであろう。従来から、理念としてはこの良質の依存性が強調されながら、それを取り出すことに必ずしも成功していない。質問項目の作成のさらなる工夫が必要であるのかも知れないし、質問紙調査によっては、とらえにくいのかも知れない。

以上のように、人間の自立性、我々の考える他とは異なる自立性がどのようなものであるかを改めて明らかにすること、その測定法について更に考えることが必要である。

本研究では、青年の自立性の定義について検討し、それに基づきその側面を仮定し、尺度作りを試みたが、今後、自立性に関わる心理的発達、依

存性、心理的脆さ・強さ等の周辺の調査も重ねつつ、尺度の精度を確認していきたい。

最後に、青年の自立性は青年期前及び成人の自立性にも関わりがあること等により、今後、自立性の世代差の検討、性差等についても検討していきたい。

**謝辞**

本研究は、北陸学院大学における他大学教員との共同研究補助金を得て実施されたものである。

＜文献＞

1）江口恵子　1966「依存性の研究」『教育心理学研究』第14巻　第1号　p.45-58.
2）福島朋子･渡辺恵子　1995「成人における自立観（1)」『日本教育心理学会第37回総会発表論文集』p.476.
3）福島朋子　1997「成人における自立観：概念構造と性差・年齢差」『仙台白百合女子大学紀要』創刊号　p.15-26.
4）福島朋子　1998研究ノート「人間的自立に関する探索的研究：40代・50代既婚者の調査から」『仙台白百合女子大学紀要』第2号　p.101-115.
5）福島朋子　1999a「成人における自立の概念構造（2)」『日本教育心理学会第41回総会発表論文集』p.320.
6）福島朋子　1999 b「既婚成人のもつ自立達成感についての一考察」『仙台白百合女子大学紀要』第3号　p.9-21.
7）伊藤美奈子　1993「個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討」『心理学研究』第64号　p.115-122.
8）伊藤美奈子　1995「個人志向性・社会志向性PN尺度の作成とその検討」『心理臨床学研究』第13号　p.39-47.
9）大石美佳・松永しのぶ・伊藤嘉奈子・鈴木公基・前野澄子　2006「大学生の自立意識に関する研究；自立観、大人観の予備的検討」『鎌倉女子大学学術研究所報』第6号　p.81-90.
10）大石美佳・松永しのぶ・伊藤嘉奈子・鈴木公基・前野澄子　2007「「青年から大人への移行期」の自立意識に関する研究：大学生の自立意識の構造とその実態」『鎌倉女子大学学術研究所報』第7号　p.55-73.
11）大石美佳・松永しのぶ　2008「大学生の自立の構造と実態：自立尺度の作成」『日本家政学会誌』第59巻　第7号　p.461-469.
12）高坂康雅・戸田弘二　2005「青年期における心理的自立（Ⅲ)：青年の心理的自立に及ぼす家族機能の影響」『北海道教育大学紀要（教育科学編)』第55巻　第2号　p.77-85.
13）高坂康雅・戸田弘二　2006a「青年期における心理的自立（Ⅱ)：心理的自立尺度の作成」『北海道教育大学紀要（教育科学編)』第56巻　第2号　p.17-30.
14）高坂康雅・戸田弘二　2006b「青年期における心理的自立（Ⅳ)：心理的自立の発達的変化」『北海道教育大学紀要（教育科学編)』第56巻　第2号　p.135-142.
15）泊真児　2001「一般的性格」『心理測定尺度集Ⅰ』サイエンス社　p.129-133.
16）米田麻由子・金丸降太　2007「青年期における自立に関する一考察」『茨城大学教育実践研究』第26号　p.183-197.